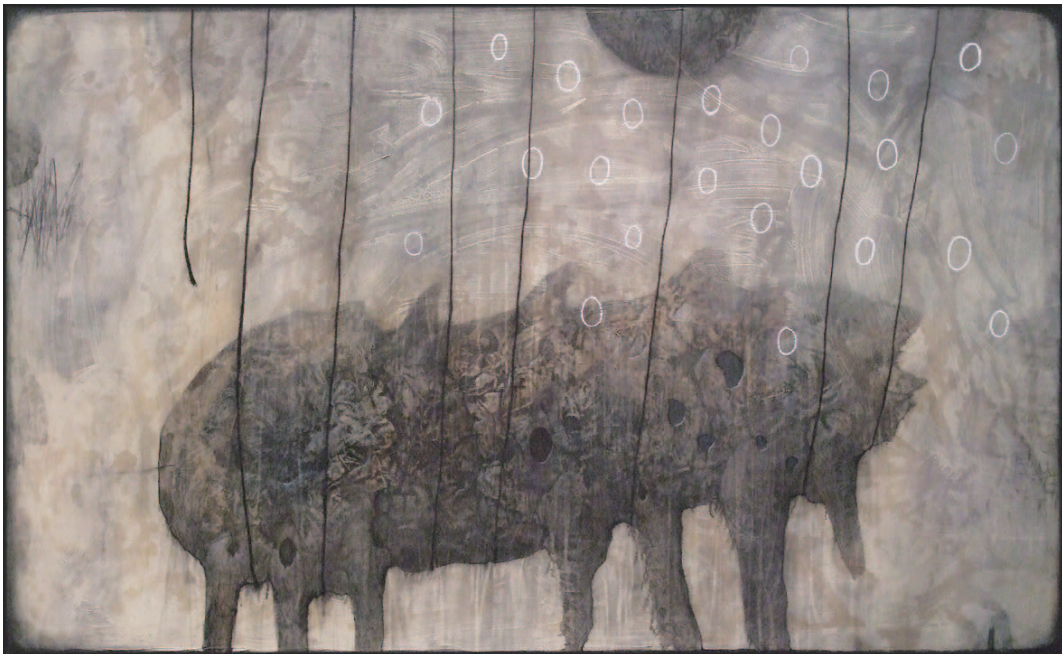




NATIVE_1
油彩、木炭、鉛筆、パステル、ジェッソ/パネルに綿布
200×200cm
2012年



OLD CLOUDE
油彩、木炭、鉛筆、パステル、ジェッソ/パネルに綿布
185×112cm
2012年



苑〜mold〜
油彩、木炭、鉛筆、パステル、ジェッソ/パネルに綿布
162×162cm
2012年



個展「異形の部屋」
2012年10月16日(火)－10月28日(日)
アートスペース感／京都



描かれたモチーフの『外形』とは、鑑賞者に「色相」とほぼ同時に認識される造形要素である（その後、『質』へ誘導され作品の良し悪しは判断される）。モチーフと空間の関係性においてデリケートであったはずの輪郭線への価値観は徐々に変化してきた。外形を情報として認識しやすくさせるために輪郭線は用いるのだが、モチーフ全体はその線で包まない。画面上（頭の中）で生まれた形は完全体を見せてはいけない。半分はまだ曖昧なまま構築されて欲しい。そんな表情をビジュアル化させるため見つけた方法は、正に「半分だけに輪郭を与える」ということ。

そして、外形の輪郭線側と、外形を溶け込ませる側が絶妙なバランスで描かれた時、他の二極化した条件も誘発する。光と影、実在と架空、半信半疑…。

二〇一二年秋の個展会場は石畳、フローリング、畳と一会場が多様な部屋が連なる空間であり、各部屋毎の特徴にどの画面を合わせるかという難題も、その二極化した「どっちつかず」の表層が不思議なパワーバランスを持つことで対応できた。

撮影協力…吉田淳一（JY DESIGN）